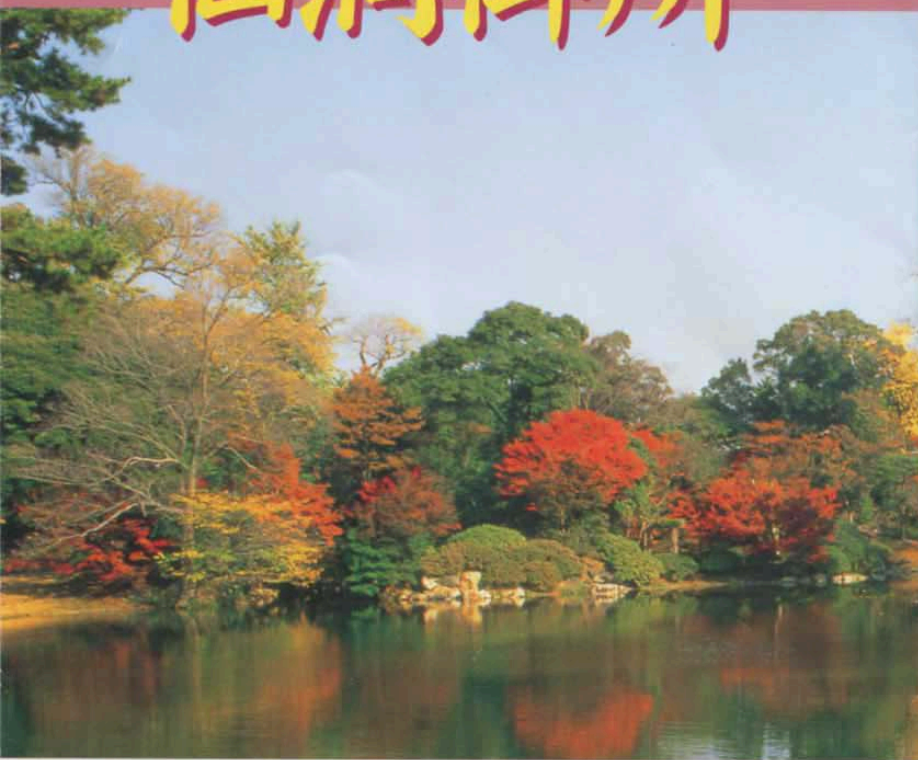


仙洞御所

Sento Imperial Palace



■仙洞御所・京都大宮御所の歴史

仙洞御所とは、皇位を退かれた天皇（上皇、院などといわれる）の御所である。後水尾上皇の御所として江戸時代初期の寛永7年（西暦1630年）に完成した。それと同時にその北に接して東福門院（後水尾上皇の皇后、將軍徳川秀忠の娘和子）の女院御所も建てられた。古くは内裏のように一定の場所にあったわけでもなく、また必ず置かれたわけでもないが、後水尾上皇以来現在の地すなわち京都御所の東南に定まった。後水尾上皇が御存命の間に三度焼失し、その都度再建されてきたが、以後、靈元、中御門、桜町、後桜町、光格の五代の上皇の仙洞御所として使用された。嘉永7年（1854年）の大火で京都御所とともに焼失したのを最後に、ちょうどその時上皇がおられなかったこともあり造営されないままとなった。そのため、現在の仙洞御所には、醒花亭、又新亭の二つの茶室以外に御殿等の建物は全くなく、東側いっぱい南北に展開する雄大な庭園が往時の面影を残しているだけである。現在の築地塀は安政2年（1855年）、京都御所と共に建造されたものである。

大宮御所とは、皇太后の御所をいう。現在、築地塀内北西にある大宮御所は、

慶応3年（1867年）に英照皇太后（孝明天皇の女御）のために女院御所の跡に造営されたものである。英照皇太后が東京に移られた後は、御常御殿のみを残して整理され、現在に伝えられている。

庭園は、仙洞御所の作事奉行であった小堀遠州が寛永7年（1630年）の御所の完成に引き続いて作庭したもので、古図によれば仙洞・女院御所とも石積みの直線的な岸辺を有する斬新な感覚の広大な池をもっていたようである。しかし、改修拡張等により遠州当時の遺構は南池東岸の一部にわずかに認められるにすぎない。18世紀の前半までに女院御所の庭園（北池）と仙洞御所の庭園（南池）が掘割（ほりわり）でつながれた。

■概説

北西の一隅にある大宮御所は、明治5年（1872年）まで英照皇太后のお住まいであったが、現在は、天皇皇后両陛下や皇太子同妃両殿下が入洛された際の御宿舎として用いられている。その南は仙洞御所の殿舎が建ち並んでいた跡であるが、現在は松林となっており、大正・昭和の即位の御大典にあたって大嘗宮がここに造営された。東側一帯は女院御所と仙洞御所の庭園が掘割によって結ばれて一体となって発展した回遊式大庭園である。総面積9万1千㎡余りで、そのうち大宮御所の面積は約1万6千㎡、仙洞御所の面積は約7万5千㎡である。

参観するための出入門は、大宮御所の正門が使用されている。

京都御所、桂離宮、修学院離宮とともに皇室用財産（国有財産）として宮内庁が管理している。

このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





京都大宮御所御車寄

大宮御所の玄関であり、現在も天皇皇后両陛下や皇太子同妃両殿下が入浴された際に使用されている。

京都大宮御所御常御殿と南庭

大正年間に内部を洋風に改め、周りにガラス戸をはめている。庭には紅梅・白梅、竹林、松が植樹され、「松竹梅の庭」とも伝えられている。



北池とその周辺



仙洞御所の池は、紅葉谷の掘割を境にして北池と南池とに二分される。大宮御所御常御殿の南庭から土堀の潜り戸を抜けると一望に見渡せる雄大な眺望が北池の全景である。造営当初は女院御所の庭であった。池の東に寄せた中島は西から見る景色に奥行きを与え、対岸の樹木の上に遙か紫に霞む東山の峰が借景として採られている。左から右へ池を巡ると、六枚橋が架かる古びた入江の阿古瀬淵があり、その北の小高い丘の上には紀貫之の邸宅跡を示す石碑が立っている。明治8年(1875年)の建立である。ゆるやかな汀線に沿って東へ進むと右手に北池をへだてて紅葉山が、左手の土堤上には鎮守社が見える。その向こうはかつては水田があった。中島は鷺島とも呼ばれ、それに架かる土橋、石橋と渡って行くと鷺の森とも呼ばれている樹木の茂みがある。その中を縫って行くと掘割にかかる紅葉橋と呼ばれている土橋へと至る。もはや北池は見えず、南池の世界が展開する。



又新亭

明治17年(1884年)に近衛家から献上された茶室である。もともとこの場所には、修学院離宮から移築した茶室止々斎があったが、火災により焼失した。茅葺と柿葺の屋根と大きな丸窓を備えた茶室で、中門により内露地と外露地に隔てられ、四つ目垣で囲むことにより結界を設けている。ここだけは侘茶の小天地を形づくっているようである。亭の門外に外腰掛があり、紅葉山裾野の蘇鉄山と相対している。



阿古瀬淵

この辺りには御所造営以前の古い池があった。阿古瀬淵の名の由来は未詳だが、平安時代の歌人紀貫之の邸宅がこの近くにあったとされることから、貫之の童名「阿古久曾」に由来するとの説がある。

紅葉橋



南池とその周辺

南池の中程に二つの中島がある。中島の一つに西岸から藤棚に覆われた八ツ橋が架けられ、中島と中島を短い石橋でつなぎ、東岸にかけて反橋が渡されるなど、趣向の異なる橋を渡れるように工夫されている。中島や東岸には、かつて滝殿、釣殿、鑑水亭などの建物があつた。また、紅葉山の下あたりには、とうとうと布落ちする幅80cm、高さ180cmの雄滝、その右手には自然石と切り石を組んだ出島の護岸が見事に眺められる。雄滝に近く、出島西岸の根元に突き出た三疊敷きほどもある大きい平石は「草紙洗の石」と呼ばれ、小野小町と大伴黒主のエピソードがある。さらに南を見れば池の向こうに醒花亭の佇まいが木の間ごしに望まれる。八ツ橋を渡り、葭島を右に見ながら南池東岸を南下し、南岸から西岸一帯の洲浜にそって苑路は北上する。洲浜には楕円形のやや平たい粒の揃った11万1千個ほどの石を池の中まで緩やかに敷き詰めてある。その石一個につき米一升の約束で運ばせたとの伝承があり、「一升石」の別名もある。玉石を敷き詰めた洲浜は京都御所にもあるが、柔らかな広がりを感じさせる点で、ここに勝るものはない。洲浜の西に万葉歌人柿本人麻呂を祀った小社がある。



醒花亭

庭園の最も南の位置に北面している茶亭で、南池を一望する格好の場所にある。正面の玄関には廂を付け出し、腰高障子を入れ、向かって左（東側）は奥に四疊半の書院、手前に五疊の入側（縁側）を取り、書院と入側の境に建具を入れないところが特異である。



醒花亭内部と庭

醒花亭の「醒花」は李白の詩から採られたもので、入側の東、鴨居の上に拓本の額として掲げられている。額の字は中国明の時代の郭子章の筆である。今はない止々齋・鑑水亭とともに、煎茶でいう回遊式庭園の三店（酒店、飯店、茶店）を構成したと思われるが、また醒花亭の各部屋を三店にあて、この建物一つで三店を兼ねたとする考え方もある。

東の庭には「ふくろう」の銘のある手水鉢を据え、飛石を配し、銭型の蹲踞（茶庭の手水鉢）と朝鮮灯籠が植え込みによく調和している。



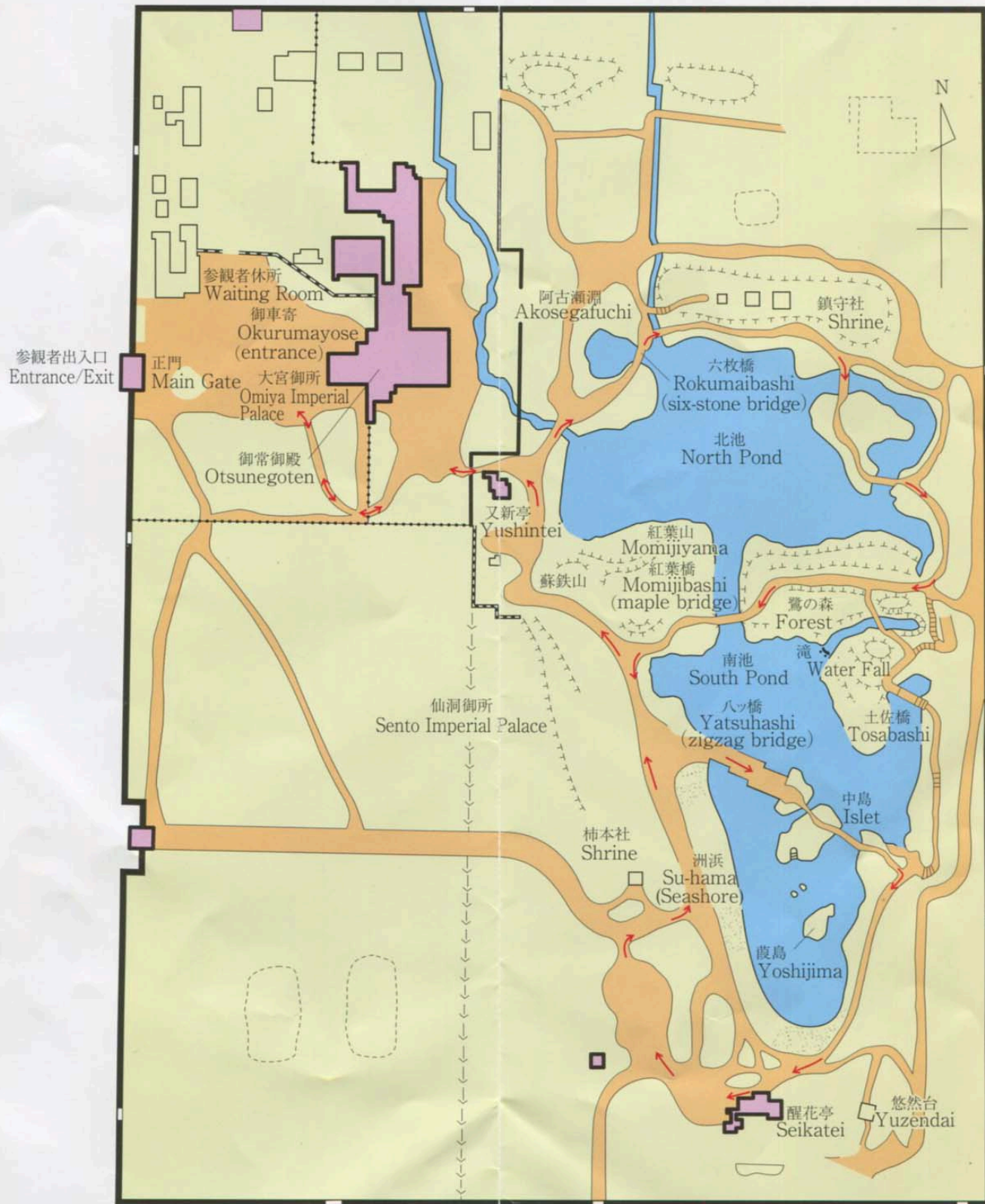
醒花亭から洲浜、南池を臨む



洲浜に沿って直線に広い道がある。この道は桜の馬場と呼ばれ、延享4年（1747年）に桜町上皇が歌人冷泉為村に選ばせた仙洞十景の一つに「醒花亭の桜」として挙げられている。

当時の仙洞十景は、寿山の早苗、古池の款冬、茅葺の時雨、神祠の夜燈、滝殿の紅葉、釣殿の飛螢、鑑水の夕照、悠然台の月、醒花亭の桜、止々齋の雪である。

■仙洞御所 略図



このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



発行 公益財団法人菊葉文化協会
写真・資料提供 宮内庁